

ハノイで通りを渡る日本人——ベトナム

清水達也

出張でハノイに行ったときに、夕暮れの街へ散歩に出かけた。社会主義国の整然とした首都をイメージしていたけれど、通りにはオートバイがあふれ、道ばたには色とりどりの果物が並び、他の東南アジア諸国と変わらない活気に満ちている。

オートバイに自転車やシクロ（人力タクシー）が入り交じり、道路は川のように流れている。これに荷物を満載して黒煙を吐くトラックやバスが加わる。市の中心部以外では、片道二車線の通りでも信号がない。散歩の途中で通りを渡ろうとして、困った。オートバイや自転車の流れの切れ目で渡ろうとしても次から次へとやってきて、全然渡れない。近道をしようと中央分離帯のある道路を逆行してくる人もいる。向こうから来るオートバイと自転車の群を見つめ、スピードの見当をつけて、わずかな切れ目を縫うように横切る。スピードを上げてやってくるオートバイをやりすごそうと道路の真ん中で立ち止まろうとすると、周りのオートバイや自転車が慌ててブレーキをかける。何度かぶつかりそうになり、私は通りを渡るのが怖くなってしまった。

ただ道路を渡らなければ散歩には行かない。そこで、地元の人がどのように道路を渡っているか、観察することにした。す

ると、彼らはやってくるオートバイをかえりみることなく、悠然と横切っている。通りの真ん中で立ち止まることもない。自転車もオートバイも、わずかにスピードを下げて除けていく。自分の進む方向をまっすぐ向いて、ひるまずに一定の歩調で歩くのが、道を横切るコツのようである。さらに観察すると、交差点で曲がろうとする自転車やオートバイは、横から来ている人を気にせずには運転をしている。

タクシーに乗った時に運転手の視点から見ているが、同じような傾向がある。細い通りから大きな通りに入る時は、半ば強引にオートバイの流れに割り込む。しかし、大きな通りを走っていても、横から入ってくるオートバイには注意を払って、速度をゆるめる。

ここでふと、二年前に英国で勉強していたときに友人から聞いた話を思い出した。英国には、交差点の中心にラウンドアバウト（トラフィック・サークルともいう）と呼ばれる円があり、左側通行の英国の場合だと自動車時計回りにこの円に入り、直進の時には半周、右折の時には四分の三周して目的の方向に出る。右側通行のヨーロッパ大陸の場合には、反時計回りになる。このラウンドアバウトでは、入る手

ビードを落とし、既に円の中に車がいればこれを優先させる。いったん円に入ってしまったら、後は円には入ってくる車を気にすることなく自分の出たい方向へ進む。

スイス、フランス、英国に住んだことのあるギリシア人の友人の話によれば、最近までヨーロッパ大陸ではこの優先順位が逆だったという。つまり入る方が優先で、円に入ってから、前方で円に入ろうとしている車がいれば、スピードを落とし、一時停止をする。何かと英国を仲間外れにするヨーロッパにおいても、このラウンドアバウトの決まりに関しては、英国方式が合理的であると認められたらしい。最近になってヨーロッパ大陸でも英国と同様に、既に円に入っている車を優先するように改められたという。

この話を思い出し、ハノイの人が道路を渡ったり交差点に入る時に、横から来る人を気にしないのは、旧宗主国フランスの以前の交通規則の影響ではないか、と思った。ベトナムから来た研修生にこの話をしたら「信号があったり、警官が整理をしていけば止まる。そうでなければ止まらずに走り抜ける」。私の考えすぎなのだろうか。

（しみず たつや／開発研修室）